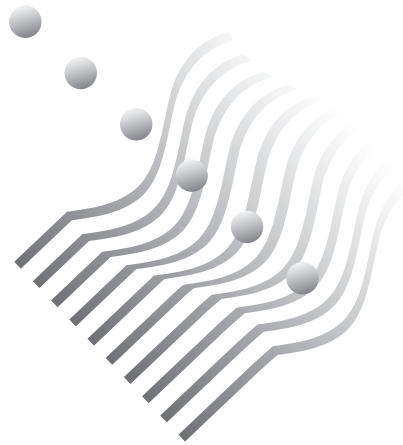


第2章

学習に関する意識・実態と 学力の関連

- 「学習に関する意識・実態調査」と
「進研模試」のクロス分析より -



分析にあたって

1. 「学力」の意味について

今回の分析では、「進研模試」(ベネッセコーポレーション実施の模擬試験)の結果を「学力」とみなし、「学習に関する意識・実態調査」の結果とクロスさせて分析している。それは、この試験が、当該学年の学習の目標が達成されているかどうかを客観的に把握するとともに、幅広い資質・能力が測定できる内容であると考えためである。

しかし、測定する資質・能力は、筆記形式で短時間に行う1回限りのテストの範囲にならざるを得ないという制約があり、ある程度は限られた範囲の「学力」を測定していることは間違いない。また、実施教科も数学、国語、英語の3教科にとどまる。この点に留意して、調査結果をみる必要があると考える。

今後、さまざまなタイプの問題開発や経年での実施などによって、より包括的な「学力」の把握が必要だが、今回は1つの試みとして調査実施、分析を行った。

2. 「進研模試」の出題の方針

進学を前提とした高校生にとって解答しがいがあり、かつ受験生の弁別ができる内容・構成になる出題を行う。出題範囲は、2年生1学期までの履修内容で、履修形態や進捗状況について全国960校以上の高校を調査し、その集計に基づいて決定する。

3. 出題の範囲

数学(実施100分)

[数学X] 共通問題 = 数学I全範囲/数と式、選択問題 = 数学I / 図形と式/数と式/数列(漸化式を除く)より2題選択

[数学Y] 共通問題 = 数学I全範囲/数と式、選択問題 = 三角関数/図形と式より1題、数列(漸化式を除く)/ベクトル(空間ベクトルを除く)/複素数より1題選択
履修状況によりX、Yのいずれかを選択。ただし、難易度は揃えてある。

国語(実施80分)

現代文・評論/現代文・小説/古文/漢文

英語(実施80分)

共通問題 = 発音・アクセント/文法・語法/長文読解(2題)/表現力、選択問題 = リスニング/会話表現より1題選択

4. 「学力」の階層化

本章の分析のために、試験によって測定した得点を以下の手続きにより階層化した。

- (1) 数学、国語、英語の合計の得点を偏差値に換算する。
- (2) 偏差値60以上を「学力上位階層」、55以上60未満を「学力中上位階層」、50以上55未満を「学力中位階層」、45以上50未満を「学力中下位階層」、45未満を「学力下位階層」として、3教科合計の学力階層を出す。

この結果、3教科合計の学力階層の合計人数および性別人数は表2-0-1、学校ランク別の学力階層は表2-0-2のようになった。

5. 調査対象の特徴

有効調査対象者の数学、国語、英語、3教科合計の偏差値は、表2-0-3のようになる。偏差値の平均値は各教科、3教科合計ともに、52から53で、「進研模試」全体の受験者の中では、やや上方に偏った層を対象としていることになる。

表2-0-1 3教科合計の学力階層（合計/性別） 人数（%）

	合 計	性 別	
		男 子	女 子
学力上位階層（偏差値60以上）	740（25.6）	414（27.6）	326（23.5）
学力中上位階層（55以上60未満）	486（16.8）	250（16.7）	236（17.0）
学力中位階層（50以上55未満）	531（18.4）	282（18.8）	249（17.9）
学力中下位階層（45以上50未満）	516（17.9）	254（16.9）	262（18.8）
学力下位階層（偏差値45未満）	617（21.3）	300（20.0）	317（22.8）
合 計	2,890（100.0）	1,500（100.0）	1,390（100.0）

調査対象3,106名のうち、216名は数学、国語、英語のいずれかを未受験であった。

表2-0-2 3教科合計の学力階層（学校ランク別）（%）

	学校ランク			
	上位ランク校 （偏差値55以上）	中上位ランク校 （50以上55未満）	中下位ランク校 （45以上50未満）	下位ランク校 （偏差値45未満）
学力上位階層（偏差値60以上）	51.6	15.9	5.5	1.3
学力中上位階層（55以上60未満）	19.5	23.3	13.9	3.6
学力中位階層（50以上55未満）	15.6	27.2	16.9	12.2
学力中下位階層（45以上50未満）	9.5	22.3	23.0	24.8
学力下位階層（偏差値45未満）	3.9	11.2	40.8	58.1

表2-0-3 偏差値平均

	受験者数	偏差値平均
数 学	2,910	52.33
国 語	3,085	53.56
英 語	3,092	53.60
3教科合計	2,890	53.41

第1節 高校生の学習行動と学力

1. 学校での学習の様子と学力

①教科の好き嫌い・授業の理解度と学力

教科の好き嫌いと学力は相関しており、その教科が好きな生徒ほど学力が高い。また、生徒の主観的な授業の理解度は、客観的な学力階層を反映している。

Q

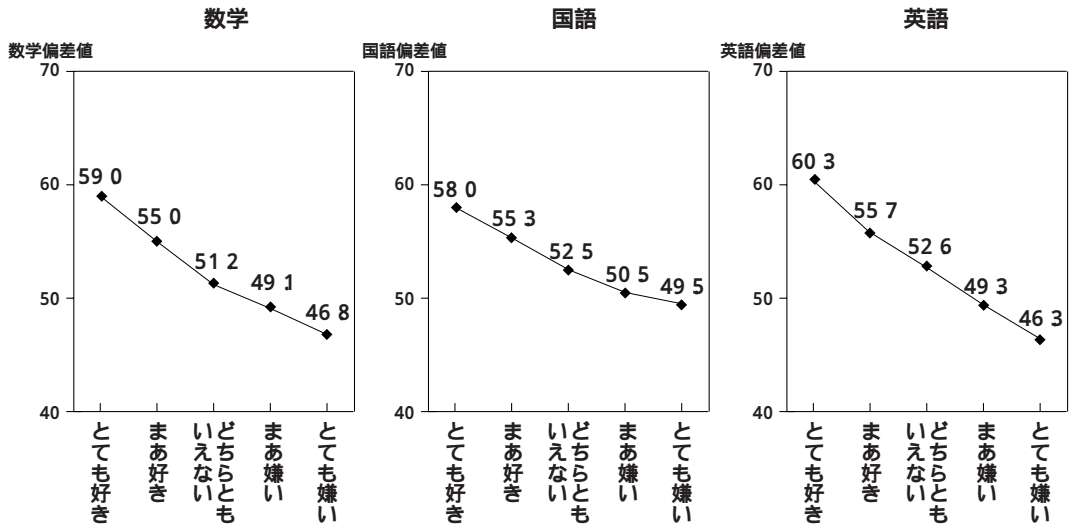
あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか。
学校の授業をどのくらい理解していますか（わかっていますか）。

数学、国語、英語の学力偏差値を、それぞれの教科についての好き嫌いの程度別に示した(図2-1-1)。どの教科についても、「好き」とする生徒ほど学力偏差値が高い傾向がみられる。その教科が「とても好き」という生徒と「とても嫌い」という生徒の学力差は、10ポイント程度ある。国語に比べて、数学、

英語で差が大きい。

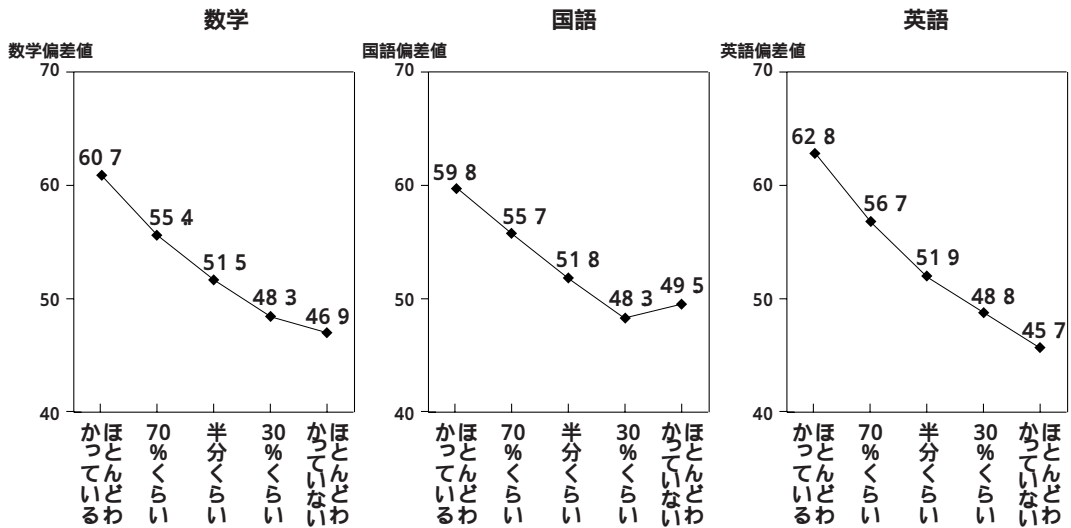
同様に、それぞれの教科についての授業の理解度と学力偏差値との関連をみると(図2-1-2)、生徒たちの主観的な授業の理解度は、学力偏差値を反映したものであることがわかる。理解度と学力の相関は、英語でもっとも高く、国語でもっとも低い。

図2-1-1 教科の学力偏差値平均点（教科の好き嫌い別）



注) サンプル数は数学受験者2910人、国語受験者3085人、英語受験者3092人。

図2-1-2 教科の学力偏差値平均点（教科の授業理解度別）



注) サンプル数は数学受験者2910人、国語受験者3085人、英語受験者3092人。

②文理のコースと学力

学力は理系優位である。「理系」に比べて「文系」の希望者に、学力下位層が多い。



あなたのことについてうかがいます。あなたは文理どちらのコースですか。

文理のコース別に学力階層の構成をみると、図2-1-3である。「理系」に占める「学力上位階層（最上位）」の比率は31.8%であるのに対して、「文系」のそれは20.9%である。また「文系」に占める「学力下位階層（最下位）」の比率は27.3%であるのに対して、「理系」のそれは14.7%にすぎない。「理系」に学力上位層が相対的に多く含まれており、

この意味で文系・理系コースは同レベルの学力水準とはなっていない。

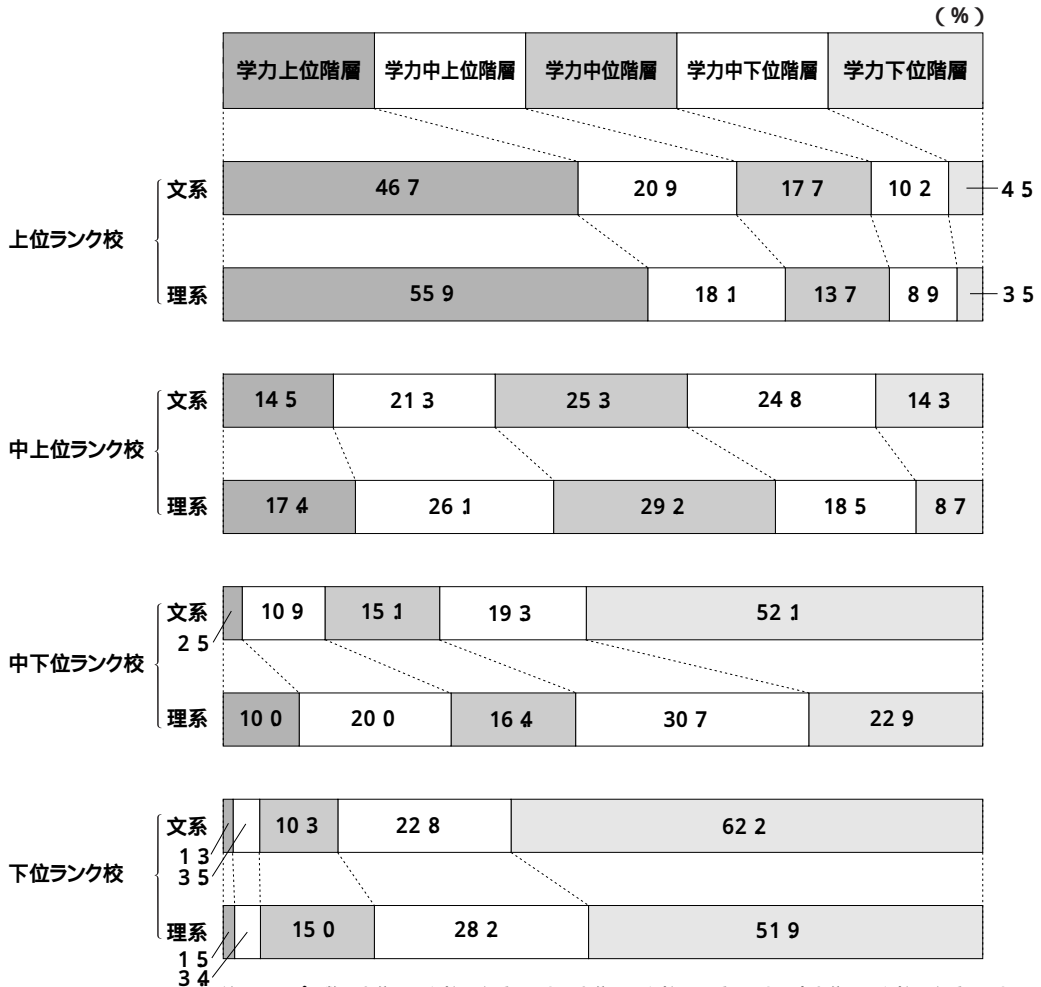
学力における理系優位の傾向は、学校ランクによらず確認できる（図2-1-4）。学校ランクが下がるにつれて全体として学力は下位にシフトするが、どの学校ランクでも文系のほうがより下位の学力階層の構成が厚い分布を示している。

図2-1-3 3教科合計の学力階層（文理のコース別）

	(%)				
	学力上位階層	学力中上位階層	学力中位階層	学力中下位階層	学力下位階層
文系	20.9	15.6	17.8	18.4	27.3
理系	31.8	18.2	18.5	16.9	14.7
どちらでもない・未定	17.6	15.1	22.7	22.7	21.8

注) サンプル数は文系1458人、理系1300人、どちらでもない・未定119人。

図2-1-4 3教科合計の学力階層（学校ランク別×文理のコース別）



注) サンプル数は上位ランク校・文系508人、上位ランク校・理系598人、中上位ランク校・文系400人、中上位ランク校・理系356人、中下位ランク校・文系238人、中下位ランク校・理系140人、下位ランク校・文系312人、下位ランク校・理系206人。

③授業の受け方と学力

より積極的な受講態度や授業への集中が、高い学力と結びついている。

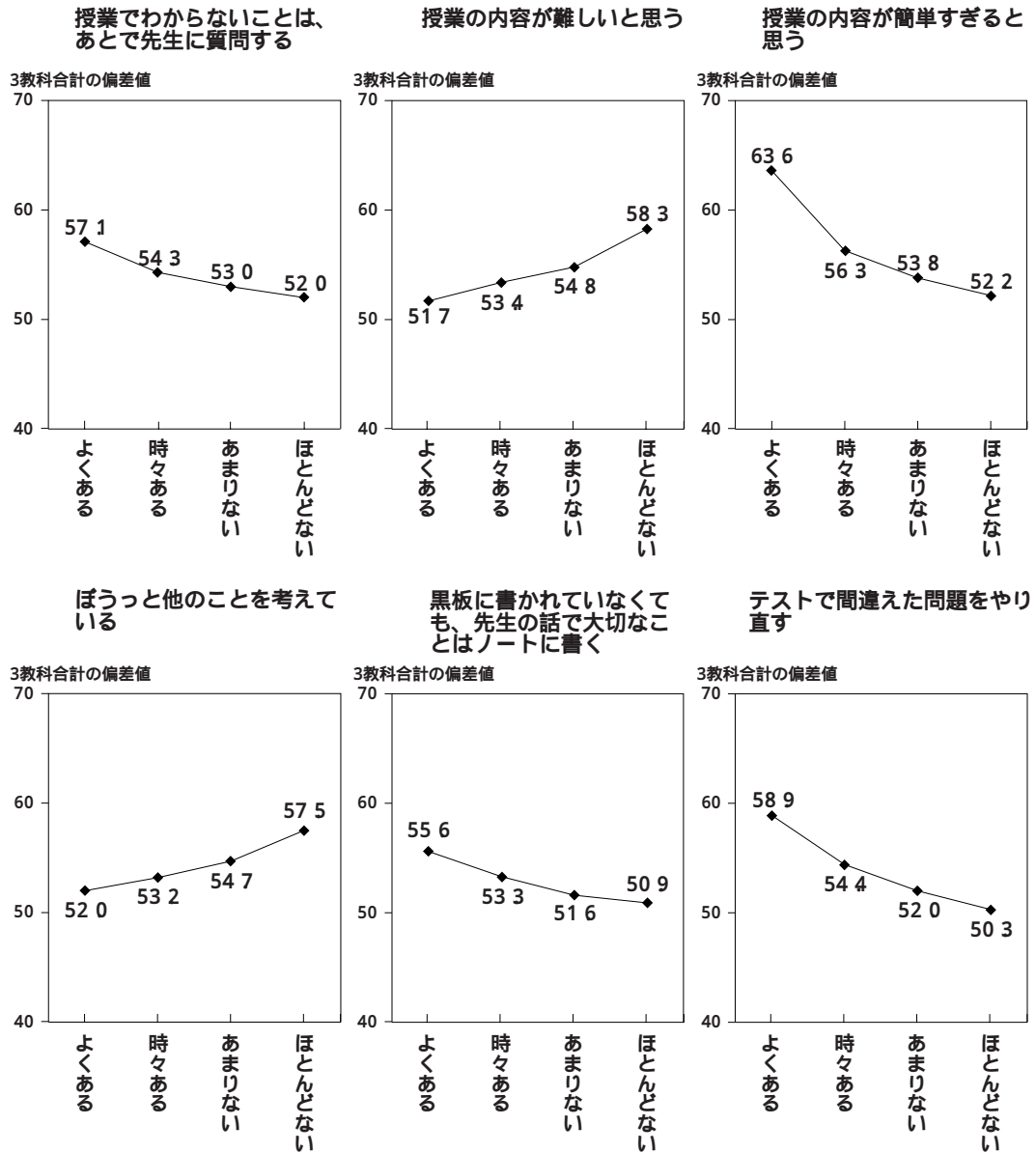


あなたの授業中の様子についてうかがいます。

学力は、授業の受け方とどのような関係にあるのだろうか。図2 - 1 - 5は、3教科合計の学力偏差値平均点を、授業の受け方別に示したものである（差がみられた項目のみ示した）。「授業の内容が難しいと思う」生徒ほど学力が低く、逆に「授業の内容が簡単すぎると思う」と答えた生徒ほど学力が高い。また、「授業でわからないことは、あとで先生

に質問する」「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」ことが多い生徒ほど高い学力を示し、「ぼうっと他のことを考えている」ことが多い生徒ほど学力が低い。予想どおり、より積極的な受講態度や、授業への集中が、高い学力と結びついている。

図2-1-5 3教科合計の学力偏差値平均点（授業の受け方別）



2. 家での学習の様子と学力

① 家庭学習の頻度・家での学習時間と学力

家での勉強を「ほとんど毎日する」生徒の47.1%が「学力上位階層」で、「家ではほとんど勉強しない」生徒のうち43.1%は「学力下位階層」である。1日あたりの平均学習時間(平日)は、「学力上位階層」から順に105.3分、85.8分、77.7分、69.3分、44.5分と減少する。同一の学力階層の生徒であっても、上位ランクの高校のほうが学習時間が長くなる。

Q

家での勉強についてうかがいます(学習塾や予備校、家庭教師との学習は除きます)。あなたはふだん、家でどのくらい勉強をしますか。

あなたはふだん(月曜日～金曜日)学校での授業以外に1日に何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。

日曜日は、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください。

ふだん(月曜日～金曜日)テレビを1日に何時間くらい見ますか。

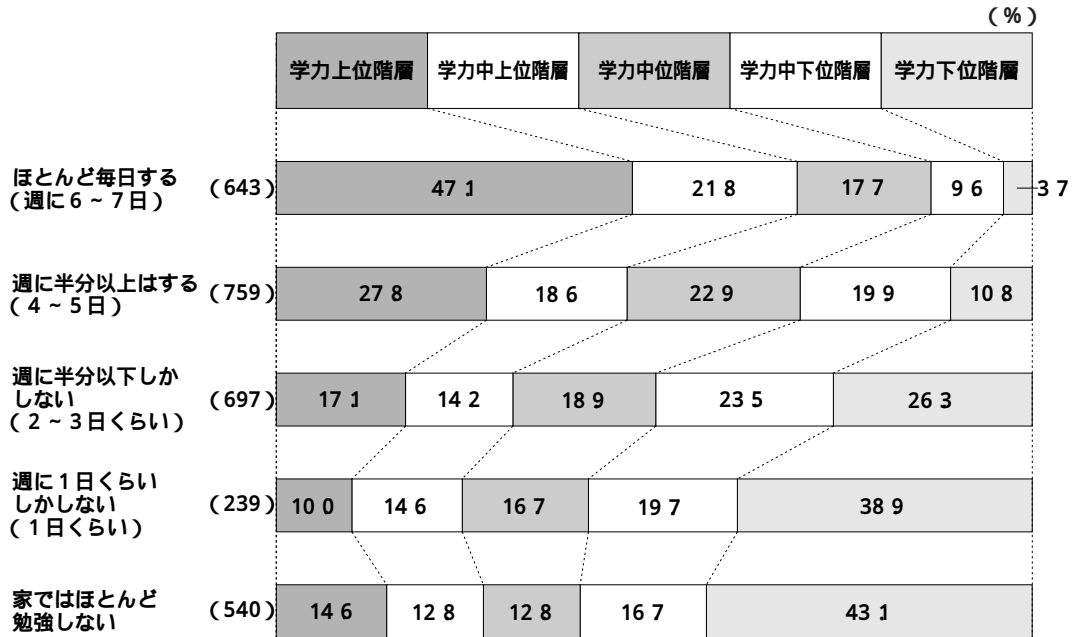
まず、家での学習の頻度と学力の関係をみてみよう(図2-1-6)。家での学習習慣は、学力と強くかかわっている。家での勉強を「ほとんど毎日する」生徒の47.1%が、「学力上位階層」である。ほとんど毎日勉強しているにもかかわらず「学力中下位階層」以下の者は、1割強にすぎない。逆に、「家ではほとんど勉強しない」生徒のうち43.1%は、「学力下位階層」である。ただし、「家ではほとんど勉強しない」生徒でも、その14.6%は「学力上位階層」、12.8%は「学力中上位階層」である。

1日あたりの平均学習時間を概算してみると(図2-1-7)「学力上位階層」では105.3分(平日学習時間)であり、下位になるにしたがって、85.8分(中上位階層)、77.7分(中位階層)、69.3分(中下位階層)、44.5分(下位階層)と減少する。学習時間とは逆に、テレビ視聴時間は、学力下位層ほど顕著に増加

する。「学力下位階層」のテレビ視聴時間は、学習時間の3倍弱である。

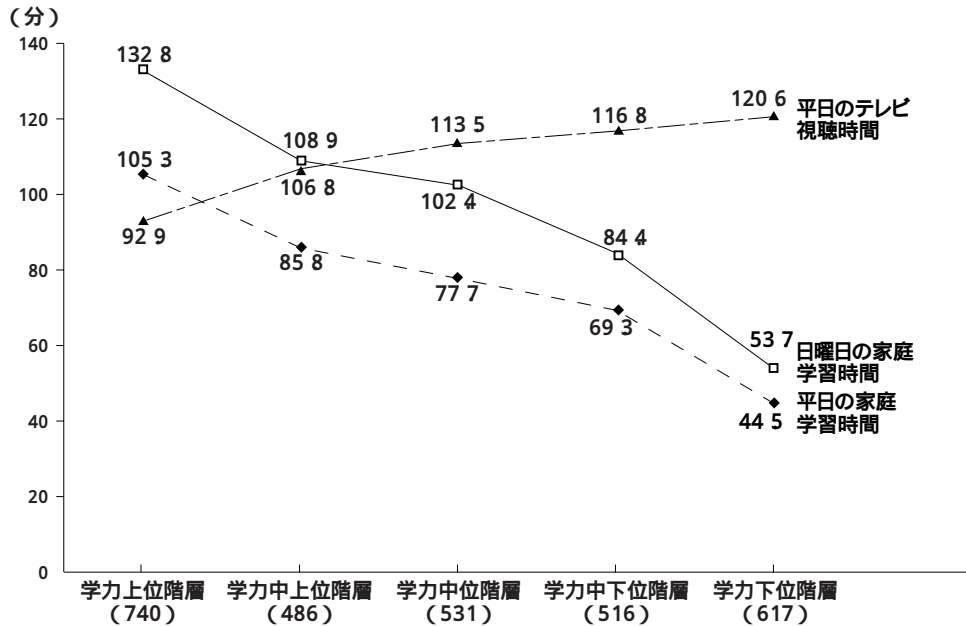
平日の学習時間と学力階層の関連をさらに学校ランク別にみると(図2-1-8)、興味深い傾向が現れている。同一の学力階層の生徒に着目すると、中上位ランク以下の高校の場合、学習時間の差はほとんどないか、あるいはあってもわずかである。しかしながら、上位ランク校の生徒は、同じ学力階層の他のランクの学校の生徒に比べて、学習時間が明らかに長くなっている。たとえば、上位ランク校の生徒で「学力上位階層」の平均学習時間は112.8分、同じ学力ではあっても中上位ランク校、中下位ランク校の生徒は、それぞれ75.0分、80.0分である。このことは、上位ランクの高校には、ある種のアカデミックな風土(校風)があって、それが学習時間を長くする効果を持っていることを物語る。

図2-1-6 3教科合計の学力階層（家での学習頻度別）



注) ()内はサンプル数。

図2-1-7 家での学習時間、テレビ視聴時間の平均（3教科合計の学力階層別）

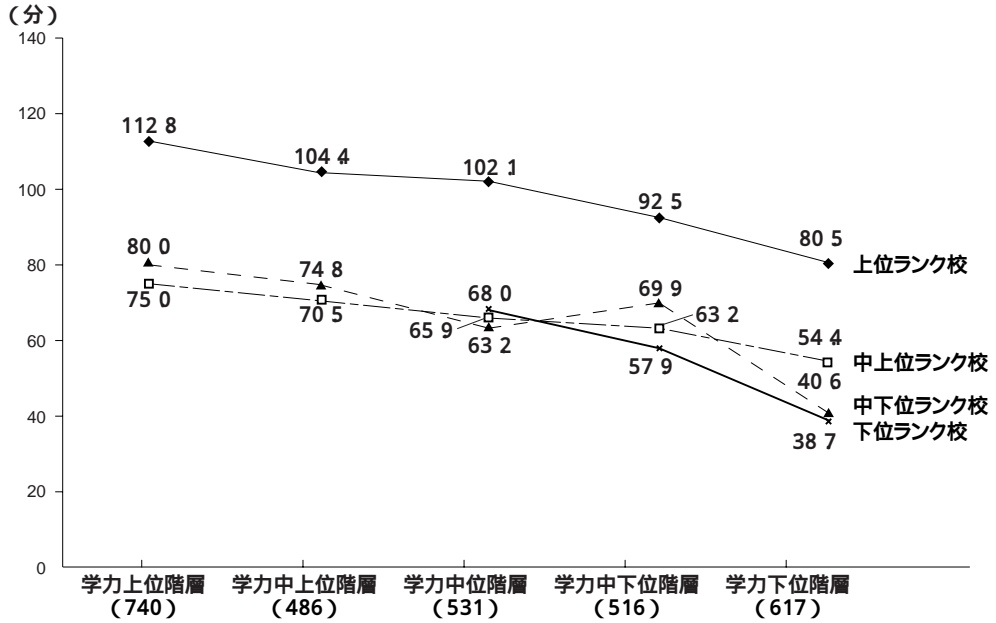


注1) 数値の単位は分。

注2) 「ほとんどしない(見ない)」を0分、「およそ30分」を30分、「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」はそれぞれの時間、「それ以上」を4時間として平均時間を算出した。

注3) ()内はサンプル数。

図2 - 1 - 8 平日の家庭学習時間の平均（学校ランク別×3教科合計の学力階層別）



注1) 数値の単位は分。

注2) 「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」はそれぞれの時間、「それ以上」を4時間として平均時間を算出した。

注3) 母数が20人に満たない箇所の平均学習時間は省略した。

注4) ()内はサンプル数。

②家での勉強内容と学力

学力上位層ほど、家で「学校の授業の予習」を行う生徒が多く、また「塾や予備校の授業の予習・復習」「書店などで売っている問題集・参考書」を使った勉強をする生徒が多い。

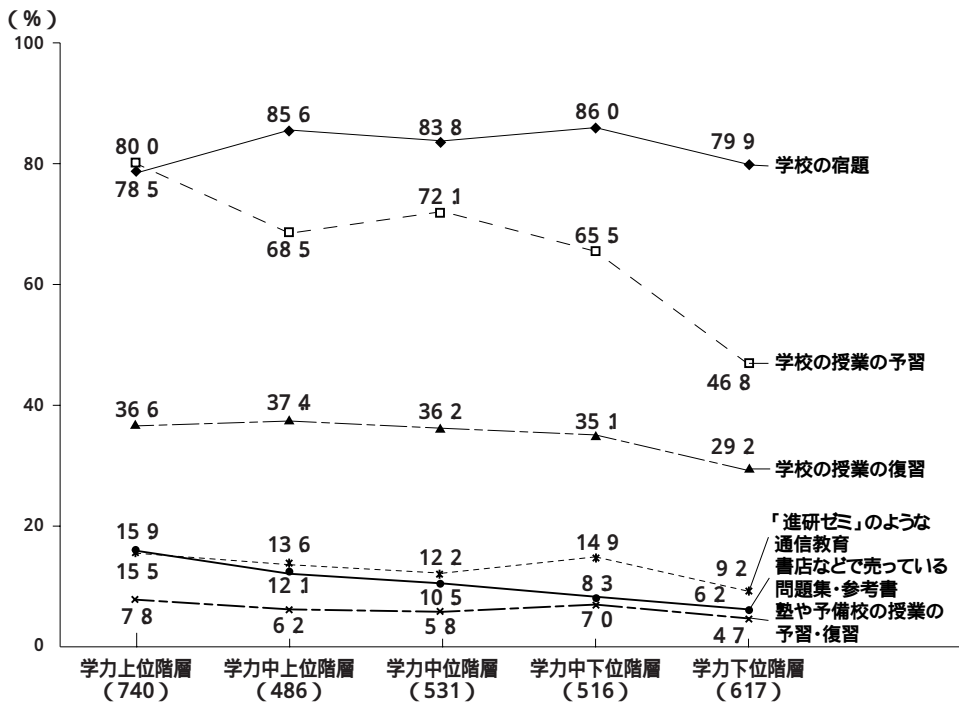


家では主にどんな勉強をしていますか。

家での勉強内容と学力はどう関係しているのか(図2-1-9)。第一に、家で「学校の授業の復習」をする生徒は、「学力下位階層」で少ないことを別として)学力階層によらずほぼ4割弱の比率を示すが、「予習」をする生徒は上位層で顕著に多い(「学力上位階層」から順に、80.0% 68.5% 72.1% 65.5% 46.8%)。第二に、「塾や予備校の授業の予習・復習」と「書店などで売っている

問題集・参考書」は絶対数が少ないものの、学力上位層ほど多い。第三に、「学力下位階層」は、いずれの項目についても概して低い数値を示す。これは、「学力下位階層」は、そもそも家での学習頻度が小さく、また学習時間も短いことの現れだろう。「『進研ゼミ』のような通信教育」の勉強も、「学力下位階層」のみ低い数値を示している。

図2-1-9 家での勉強内容(3教科合計の学力階層別)



注1) 複数回答。

注2) ()内はサンプル数。

③家での学習の様子と学力

「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」ことや「予習をしてから授業を受ける」ことは高い学力と関係している。

Q

家での勉強についてうかがいます。

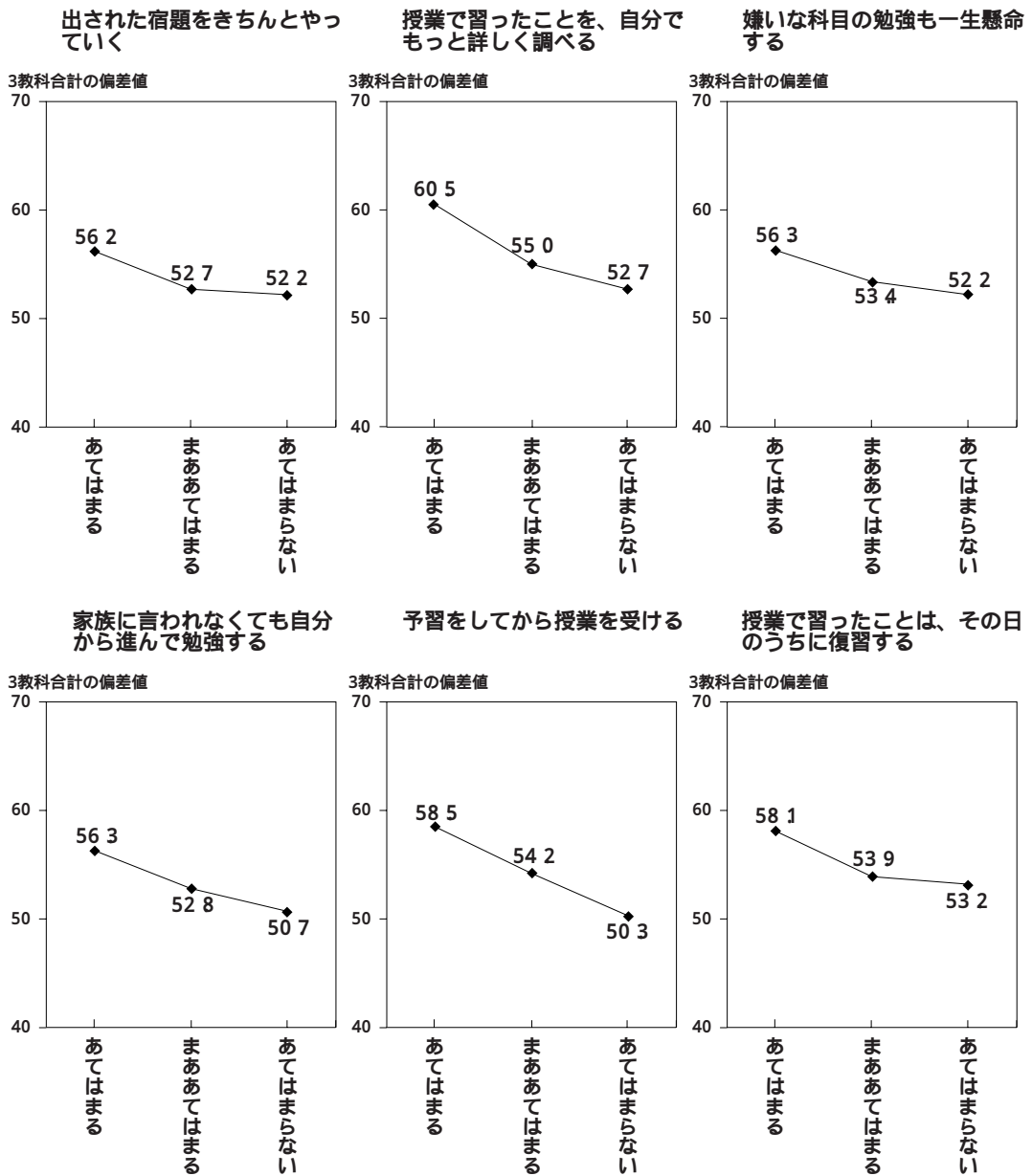
学力と関連のあった、家での学習の様子を示したのが、図2 - 1 - 10である。

「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」生徒ほど、高い学力を示す。また、「予習をしてから授業を受ける」ことが多いほど、学力が高い。これらは、先に述べた、より積極的な受講態度や予習型の家庭学習が

高い学力と結びついていたことと符合する。

上記2項目に比べると学力との関連が弱いものの、「出された宿題をきちんとやっていく」「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」といったことをよくする生徒ほど、学力が高い傾向がみられる。

図2-1-10 3教科合計の学力偏差値平均点（家での学習の様子別）



注) サンプル数は3教科受験者2890人。

3 . 学校外の学習機会と学力

① 学習塾・予備校の利用と学力

塾・予備校の利用率は、「学力上位階層」29.7%、「中上位階層」24.9%、「中位階層」19.2%、「中下位階層」22.1%、「下位階層」12.3%と、おおむね学力上位層ほど高い。通っている塾・予備校のタイプは、学力上位層は「進学塾」に、下位層は「補習塾」に分化している。

Q

あなたは今、放課後や日曜日に、学習塾や予備校へ行っていませんか(そろばん、習字などの塾は除きます。「公文」のような自習教室は含めません)。

[行っている人にうかがいます]

あなたの行っているのは、どんな学習塾(予備校)ですか。

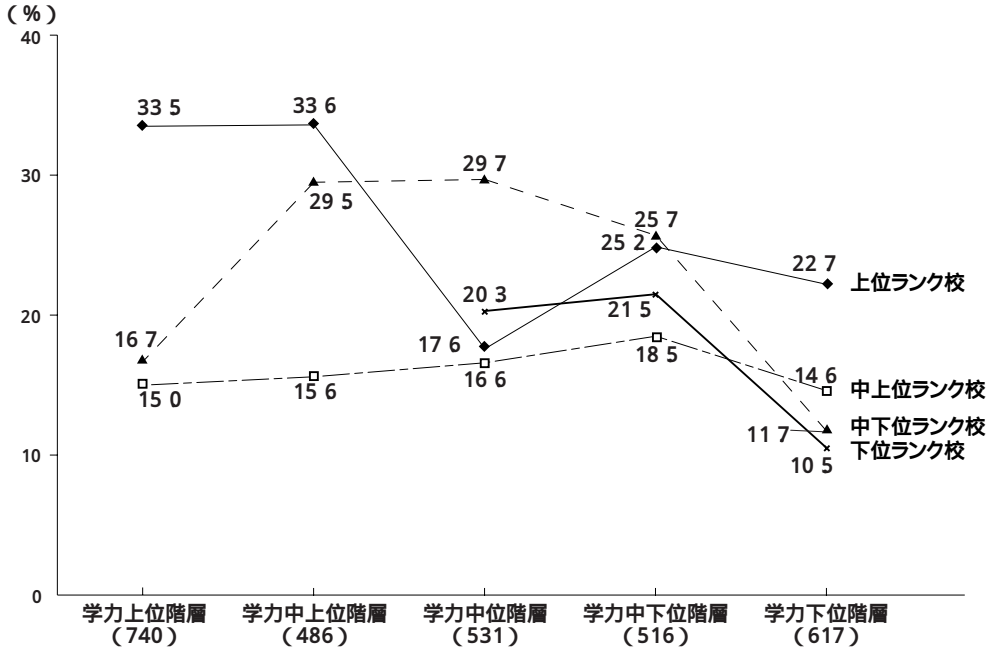
学力階層別に、塾・予備校の利用率をみると、「学力上位階層」29.7%、「中上位階層」24.9%、「中位階層」19.2%、「中下位階層」22.1%、「下位階層」12.3%である。「中下位階層」の数値がやや外れているものの、おおむね学力上位層ほど通塾率が高い傾向がある。

これを学校ランク別にみると、やや複雑な結果を示す(図2-1-11)。上位ランク校では、「学力中位階層」で通塾率が低い。中上位ランク校では学力階層による差はほとんどない。中下位ランク校では、上位ランク校とは逆に、「学力上位階層」と「下位階層」

で通塾率が低い。下位ランク校では「学力下位階層」で低い数値を示している。

通っている塾や予備校のタイプは、学力によって対照的な傾向を示す(図2-1-12)。「大学や短期大学を受験するための進学塾」は、「学力上位階層」55.9%であるのに対し、「学力下位階層」31.6%である。逆に「学校の勉強がわかるようになるための補習塾」は、「学力下位階層」56.6%に対し、「上位階層」は32.3%である。学力上位層は「進学塾」に、下位層は「補習塾」に分化している。

図2-1-11 学習塾（予備校）の利用（学校ランク別×3教科合計の学力階層別）



注1) 母数が20人に満たない箇所の数値は省略した。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-1-12 学習塾（予備校）のタイプ（3教科合計の学力階層別）

学力階層	タイプ (%)		
	学校の勉強がわかるようになるための補習塾	大学や短期大学を受験するための進学塾	その他、無答・不明
学力上位階層 (220)	32.3	55.9	11.8
学力中上位階層 (121)	38.8	52.9	8.3
学力中位階層 (102)	45.1	38.2	16.7
学力中下位階層 (114)	51.8	34.2	14.0
学力下位階層 (76)	56.6	31.6	11.8

注) ()内はサンプル数。

② 諸学習機会の利用と学力

「通信教育」は、「学力上位階層」から「中下位階層」までは2割強で横並び、「学力下位階層」のみ15.7%と低い。「塾や予備校の夏期講習」は、学力上位層ほど利用率が高い。



あなたは次のようなことをしていますか。

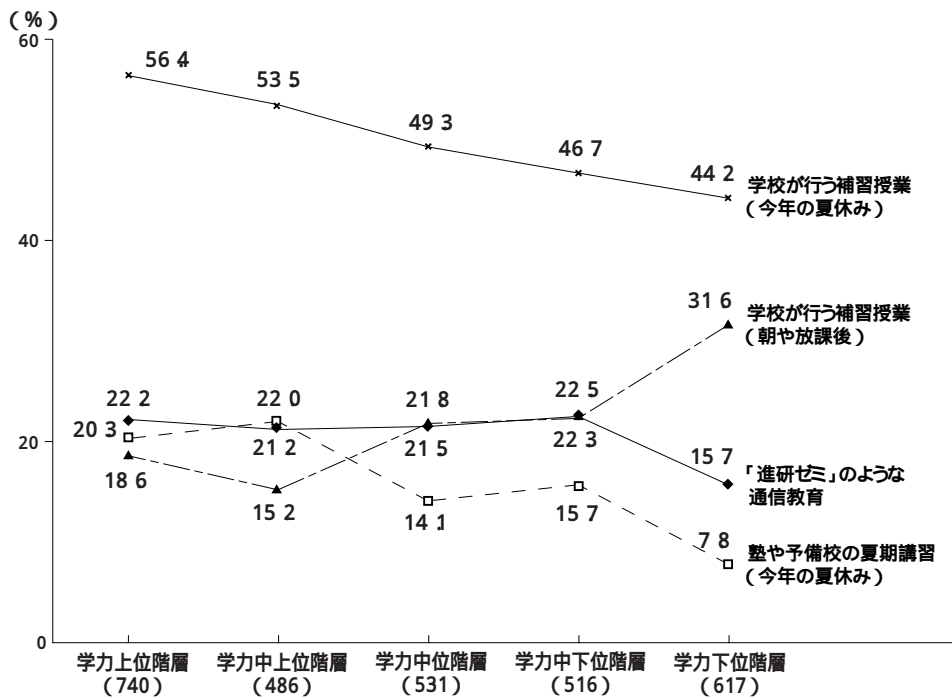
諸学習機会と学力の関連はどうか（図2 - 1 - 13）。

「『進研ゼミ』のような通信教育」は、「学力上位階層」から「中下位階層」までは2割強で横並びだが、「学力下位階層」のみ15.7%と低い値を示す。「塾や予備校の夏期講習」

は、学力上位層ほど利用率が高い。学力階層別の通塾率と一致した傾向が出ている。

「学校が行う補習授業」のうち、「朝や放課後の通常補習」は学力下位層ほど利用率が高く、「夏休みの補習」は逆に上位層ほど利用率が高くなっている。

図2 - 1 - 13 諸学習機会の利用（3教科合計の学力階層別）



注1) 複数回答。

注2) ()内はサンプル数。

4 . 学習の方法と学力

①学習の方法と学力

学力上位層ほど、「辞書（英語・国語など）を引く」と、「プリントや問題集で数学の問題練習をする」の頻度が高い。



家では、どんな勉強の仕方をする人が多いですか。

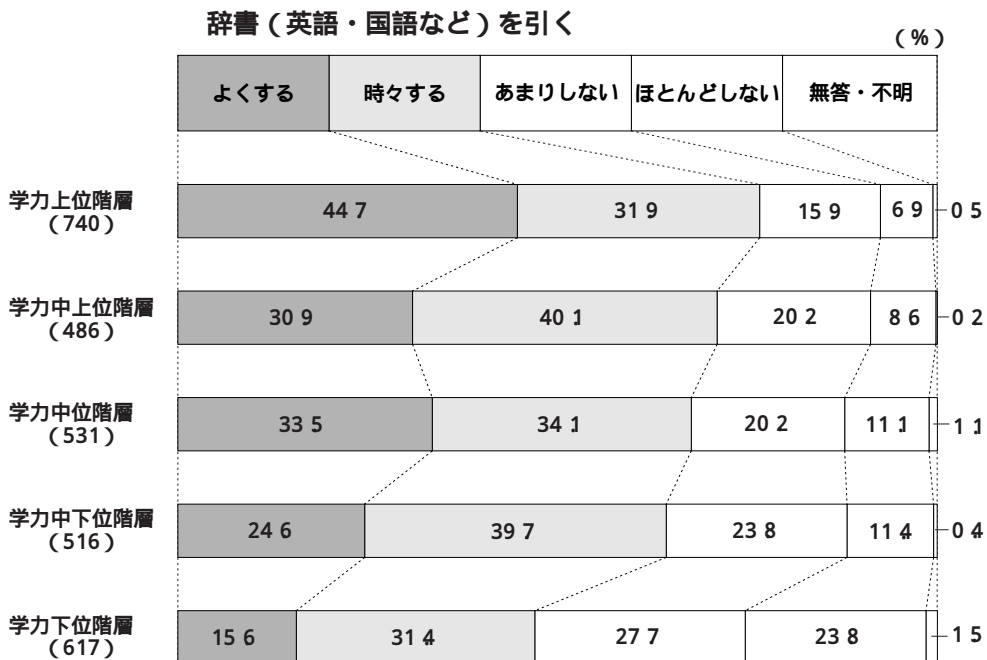
今回の調査では、どんな学習方法をとっているのかについて尋ねているが、学力階層と強い関連がみられたのは、図2-1-14と図2-1-15に示した2項目である。

学力上位層ほど、「辞書（英語・国語など）を引く」頻度が高いことがわかる。たとえば「学力上位階層」では44.7%が辞書を「よく

引く」と答えているのに対して、「学力下位階層」では15.6%にすぎない。

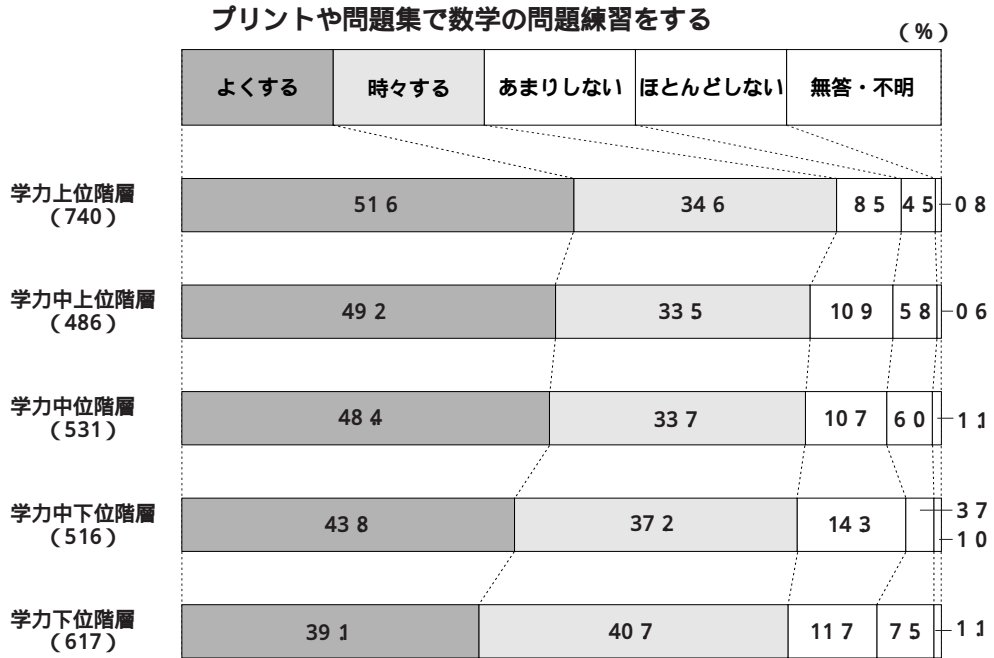
同様に、学力上位層ほど、「プリントや問題集で数学の問題練習」を「よくする」という回答が多い。「学力上位階層」では、「よくする」が51.6%と半数を超えるが、「学力下位階層」では39.1%にとどまっている。

図2-1-14 家での学習方法（3教科合計の学力階層別）



注) ()内はサンプル数。

図2 - 1 - 15 家での学習方法（3教科合計の学力階層別）



注) ()内はサンプル数。

②学習方法のタイプと学力

学力の上下によって、学習頻度や時間が異なるだけではなく、学習の方法においても質的な相違がある。

Q

あなたの勉強の仕方を分類するとすれば、どんなタイプになると思いますか。どちらかといえば近いほうのタイプに をつけてください。

(1か2のどちらか近いほうの番号に をつけてください)

学習方法のタイプと学力には、大きな関連がある。図2 - 1 - 16は、学力階層によって対照的な差がみられた学習方法のタイプをあげたものである。学力下位層に比べて上位層ほど多い学習方法のタイプは次のようなものである。

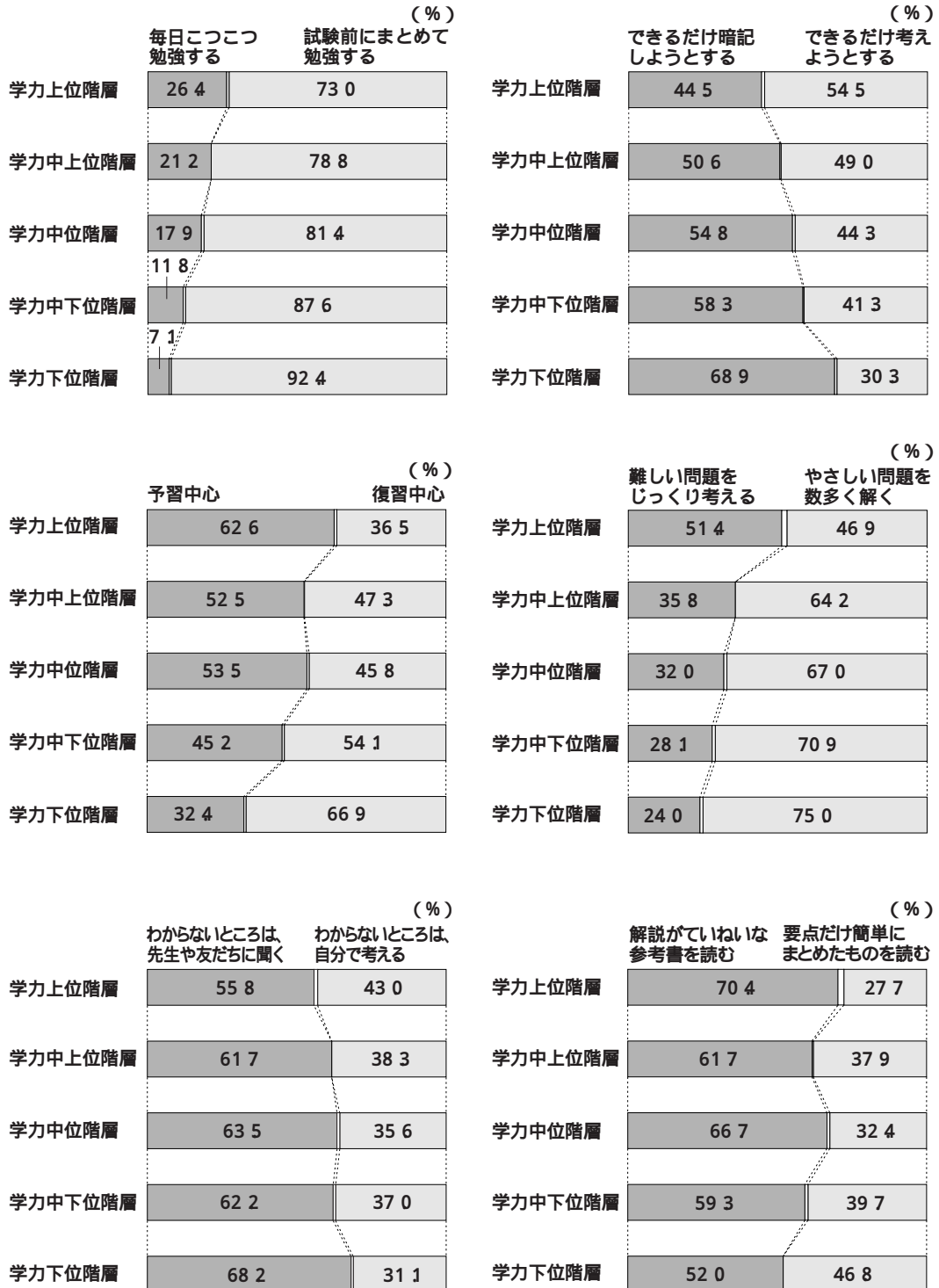
- ・「試験前にまとめて勉強する」よりも「毎日こつこつ勉強する」
- ・「できるだけ暗記しようとする」よりも「できるだけ考えようとする」
- ・「復習中心」よりも「予習中心」
- ・「やさしい問題を数多く解く」よりも「難

しい問題をじっくり考える」

- ・「わからないところは、先生や友だちに聞く」よりも「わからないところは、自分で考える」
- ・「要点だけ簡単にまとめたものを読む」よりも「解説がていねいな参考書を読む」

こうしてみると、学力の上下によって、学習頻度や時間が異なるだけではなく、学習の方法においても質的な相違があることに気づく。

図2-1-16 学習方法のタイプ(3教科合計の学力階層別)



注1)2つの学習方法のタイプのうち、どちらか近いほうを選択。

注2)項目の間の空白部分は「無答・不明」を示す。

注3)サンプル数は学力上位階層740人、学力中上位階層486人、学力中位階層531人、学力中下位階層516人、学力下位階層617人。

第2節 高校生の学習観・成績観と学力

1. 成績観と学力

①成績の自己評価と学力

主観的な成績評価は客観的な学力偏差値と相関はするが、完全に一致しているわけではない。上位ランク校、中上位ランク校で相関が高く（主観的な成績評価と客観的な学力偏差値の一致度が高い）、中下位ランク校、下位ランク校では相関が低い傾向がある。



現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。
教科の現在の成績は、学年の中でどのくらいですか。

今回の調査では、生徒自身に、①「現在の総合的な成績」（学年の中で）、②「数学の成績」、③「国語の成績」、④「英語の成績」を答えてもらっている。これらは、主観的な成績の認識を示すといっていよう。この主観的な成績と「進研模試」の学力偏差値の間には、いったいどのような関連がみられるだろうか。

まず総合的な成績の自己評価と、3教科合計の偏差値の関係をみてみよう（表2-2-1）。どの学校ランクにおいても、総合的な成績の自己評価と学力階層の間にはゆるやかな関係がみられる。たしかに、学力上位層の生徒は、自分の成績を高く位置づける傾向がある。しかし、学力上位ではあっても、自己評価は低い生徒も存在する。主観的な成績評価は客観的な学力偏差値と相関はするが、しかし、完全に一致しているわけではない。

学校ランク別に、「総合」「数学」「国語」「英語」に分けて、主観的な成績評価と客観

的な学力の相関係数を示したのが、表2-2-2である。なお相関係数の計算にあたっては、質問紙における選択肢番号を逆に設定して相関係数が正の値をとるよう、操作を加えた。

「総合的な成績」の自己評価と、「3教科合計の偏差値（学力）」の相関は、およそ0.5から0.65の範囲にある。上位ランク校、中上位ランク校で相関が高く、中下位ランク校、下位ランク校で低い。相対的に低いランクの高校では、3教科以外の教科の成績が総合的な成績に大きな影響を与えている、あるいは客観的な学力が相対的に見えにくい何らかの背景があるのかもしれない。各教科における主観的な成績評価と客観的な学力の相関は、「英語」で高く（0.50から0.61）、「数学」がこれに次ぎ（0.47から0.59）、「国語」でもっとも低い（0.32から0.49）。「総合的な成績」と同様、やはり学校ランクが低いほうが、相関が落ちる。

表2-2-1 成績の自己評価（学校ランク別×3教科合計の学力階層別）

（％）

上位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (582)	学力中上位階層 (220)	学力中位階層 (176)	学力中下位階層 (107)	学力下位階層 (44)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	5.3	0.5	0.6	0.0	0.0
	2	17.5	4.1	1.7	0.0	0.0
	3	27.3	18.2	13.1	4.7	2.3
	4(真ん中)	19.2	25.0	22.2	8.4	4.5
	5	10.5	22.3	22.2	15.9	2.3
	6	7.7	15.5	25.6	30.8	38.6
	7(下のほう)	3.8	8.2	14.2	36.4	52.3
	無答・不明	8.6	6.4	0.6	3.7	0.0

中上位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (127)	学力中上位階層 (186)	学力中位階層 (217)	学力中下位階層 (178)	学力下位階層 (89)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	11.8	1.6	0.9	0.0	0.0
	2	28.3	10.8	3.2	1.1	0.0
	3	36.2	31.2	17.5	6.7	3.4
	4(真ん中)	14.2	31.2	28.1	19.7	10.1
	5	6.3	18.3	22.6	25.8	12.4
	6	0.0	4.8	18.0	27.5	29.2
	7(下のほう)	0.8	1.1	8.8	16.9	43.8
	無答・不明	2.4	1.1	0.9	2.2	1.1

中下位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (24)	学力中上位階層 (61)	学力中位階層 (74)	学力中下位階層 (101)	学力下位階層 (179)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	20.8	4.9	1.4	1.0	0.6
	2	50.0	27.9	16.2	5.9	1.1
	3	20.8	34.4	32.4	21.8	8.4
	4(真ん中)	4.2	14.8	28.4	37.6	27.4
	5	0.0	8.2	9.5	13.9	22.3
	6	0.0	4.9	4.1	5.0	17.3
	7(下のほう)	0.0	3.3	5.4	9.9	19.0
	無答・不明	4.2	1.6	2.7	5.0	3.9

下位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (7)	学力中上位階層 (19)	学力中位階層 (64)	学力中下位階層 (130)	学力下位階層 (305)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	71.4	15.8	9.4	3.8	1.3
	2	28.6	15.8	17.2	14.6	5.6
	3	0.0	52.6	39.1	32.3	15.1
	4(真ん中)	0.0	10.5	20.3	27.7	26.2
	5	0.0	0.0	12.5	9.2	18.7
	6	0.0	0.0	1.6	5.4	17.0
	7(下のほう)	0.0	0.0	0.0	5.4	13.8
	無答・不明	0.0	5.3	0.0	1.5	2.3

注) ()内はサンプル数。

表2 - 2 - 2 教科の学力と成績の自己評価の相関(学校ランク別)

		相関係数			
		総合成績	数学	国語	英語
学校 ラン ク	上位ランク校 (1462)	0.600	0.585	0.420	0.613
	中上位ランク校 (824)	0.644	0.569	0.491	0.612
	中下位ランク校 (619)	0.577	0.560	0.448	0.562
	下位ランク校 (903)	0.498	0.470	0.315	0.504

注1) 総合成績 = 3教科合計の偏差値と総合的な成績の自己評価の相関。
各教科 = 当該教科の偏差値と当該教科の成績の自己評価の相関。

注2) ()内はサンプル数。

②とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績と学力

成績アスピレーション（とりたいと思う成績）は、学力上位層ほど高い。また、学業的能力の自己概念（今の成績はともかくうんとがんばればとれると思う成績）も、学力上位層ほど高い。しかし、がんばれば校内で中位以上の成績がとれると、大多数の生徒が考えている。

Q

あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。
現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

次に、とりたいと思う成績（成績アスピレーション）についてみてみよう（図2-2-1）。どの学力階層を観察してみても、「中の下」以下（「5」「6」「7」=7段階に分けたときの第5～第7カテゴリ）の成績をとりたいと答えた生徒は、ごく少数にとどまる。しかしながら、学力上位層ほど、より上位の成績をとりたいと考えている。「学力上位階層」で「1」（第1カテゴリ=最上位）の成績をとりたいと答えた生徒は50.9%であるのに対して、「学力下位階層」では31.4%がそう答えたにすぎない。成績アスピレーションは、学力上位層ほど高いといえる。

今の成績はともかく、うんとがんばればど

のくらいの成績をとれるか（学業的能力の自己概念）については、どうだろうか（図2-2-2）。がんばれば「1」（第1カテゴリ）の成績をとれると思っているのは、「学力上位階層」で44.1%、以下、学力階層が低下するにつれて、30.5% 28.4% 26.4% 19.8%と少なくなっていく。ただし、がんばっても「中の下」以下（「5」「6」「7」）の成績しかとれないと思っているのは、どの学力階層でもごく少数である。学業的能力の自己概念は、学力上位層ほど高いが、しかし、がんばれば校内で中位以上の成績がとれると、大多数の生徒が考えている。

図2-2-1 とりたいと思う成績(3教科合計の学力階層別)

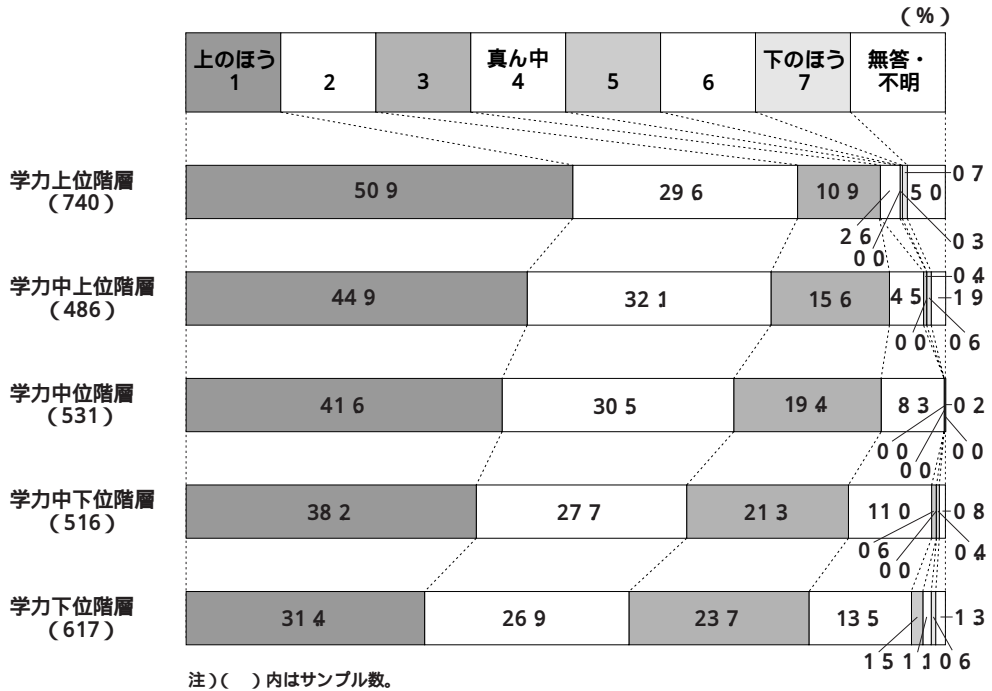
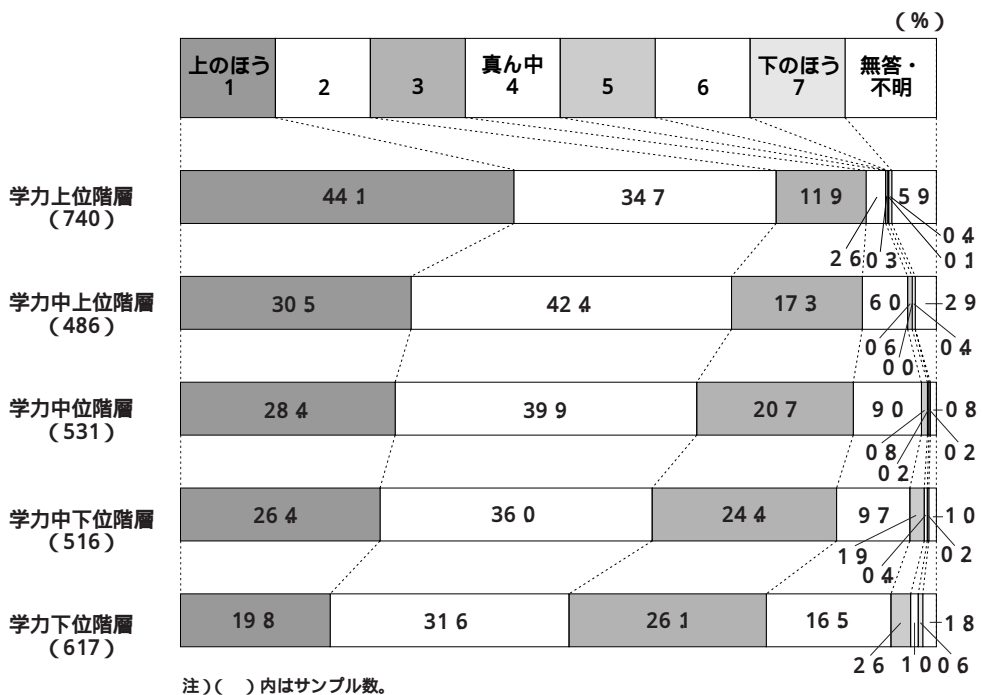


図2-2-2 がんばればとれると思う成績(3教科合計の学力階層別)



③成績観・学力観と学力

学力上位層ほど、「名門大学志向」「勉強本位志向」が強い。逆に学力下位層ほど、「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「ともかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」が目立つ。



あなたは、次のように思うことがありますか。

どのようなレベルの成績（学力）をとりたいと思っているのかを、別の角度から尋ねた設問と、3教科合計の学力階層との関連を示したのが、表2-2-3である。

学力上位層ほど強いのは、以下の傾向である。

名門大学志向 できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい。

勉強本位志向 今は勉強することが一番大切なことだ。

逆に、学力下位層ほど、次の志向が強くなっている。

ふつうの生活志向 将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい。

ともかく合格志向 どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい。

学校生活エンジョイ志向 学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない。

成績アスピレーションは、学力階層によって、こうした質的な相違も示している。

表2-2-3 成績観・学力観（3教科合計の学力階層別）

(%)

	3教科合計の学力階層				
	学力上位階層 (740)	学力中上位階層 (486)	学力中位階層 (531)	学力中下位階層 (516)	学力下位階層 (617)
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	30.3	38.5	39.5	45.7	<u>57.2</u>
どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい	20.0	26.3	28.1	32.0	<u>37.8</u>
できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい	63.4	<u>65.2</u>	<u>65.2</u>	56.2	<u>49.8</u>
学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない	<u>17.8</u>	19.8	19.8	18.8	<u>25.8</u>
今は勉強することが一番大切なことだ	<u>26.4</u>	22.2	20.2	19.2	<u>17.5</u>
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	<u>8.2</u>	10.3	9.6	8.9	<u>12.8</u>

注1) 複数回答。

注2) 下線は最大値と最小値。

注3) ()内はサンプル数。

2 . 学習上の悩みと学力

学力下位層ほど、多くの学習上の悩みを抱えている。特に、学力上位層と比べて下位層では、「上手な勉強の仕方がわからない」「努力しても成績が思うように上がらない」「どうしても好きになれない科目がある」「もっと科目の数を減らしてほしい」という回答が多い。



あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

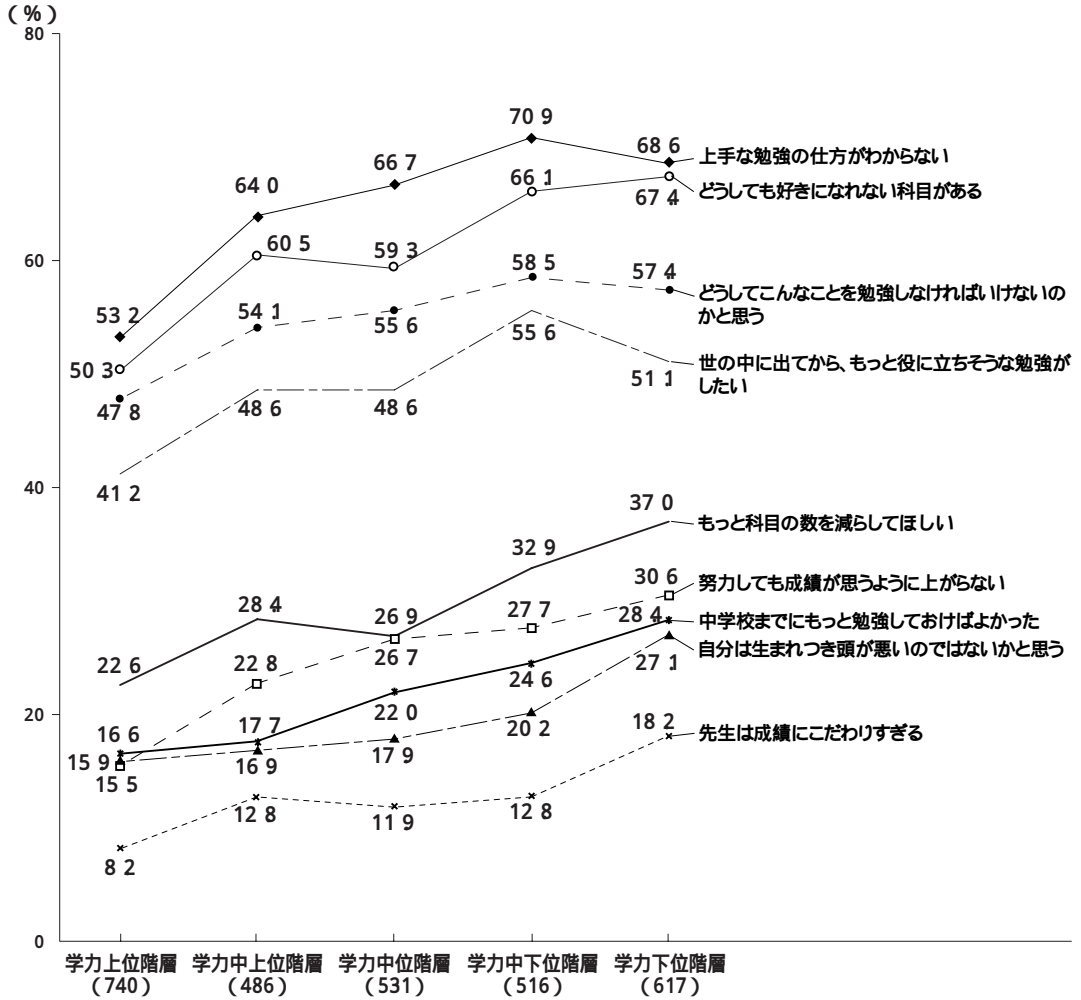
学力の高さによって、学習上の悩みは異なっている(図2-2-3)。概して、学力下位層ほど「そう思う」という回答が多く、学習上の悩みを多く抱えていることがわかる。

「学力上位階層」と「学力下位階層」の数値の開きが15%程度あったのは、次の項目で

ある(いずれも、「学力下位階層」のほうが「そう思う」という回答が多い)。

- ・上手な勉強の仕方がわからない
- ・努力しても成績が思うように上がらない
- ・どうしても好きになれない科目がある
- ・もっと科目の数を減らしてほしい

図2-2-3 学習上の悩み(3教科合計の学力階層別)



注1) 複数回答。

注2) ()内はサンプル数。

3. 進路・進学意識と学力

①希望する進学段階と学力

「大学院まで」および「四年制大学まで」を希望する生徒は、学力が下がるにつれて減少し、代わって、「短期大学まで」と「専門学校・各種学校まで」が増加する。しかし、上級学校への進学は、学力のみによって決まっているわけではない。「高校まで」を希望する生徒のうち、55.0%は「学力下位階層(最下位)」だが、「学力中上位階層」「上位階層」の生徒も、合わせて12.5%いる。「学力下位階層」の生徒の比率がもっとも大きいのは、「高校まで」(55.0%)ではなく、「専門学校・各種学校まで」(59.0%)である。セカンド・ベスト(中上位ランク校)以下の高校では、学力が下がるにつれて、大学院・四年制大学希望率が低下する。上位ランク校では、「学力下位階層」でも9割以上の生徒が「大学院・四年制大学」を希望している。上位ランクの高校では、学力にかかわらず生徒たちを四年制大学への進学へと水路づける学校風土(校風)が優勢である。



あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

学力階層別に、希望する進学段階を示したのが、図2-2-4である。「学力上位階層」では、「大学院まで」を19.5%、「四年制大学まで」を74.7%が希望している。「大学院まで」および「四年制大学まで」を希望する生徒は、学力が下がるにつれて減少し、代わって、「短期大学まで」と「専門学校・各種学校まで」が増加する。「学力下位階層」の希望は、「大学院まで」1.8%、「四年制大学まで」63.4%、「短期大学まで」5.3%、「専門学校・各種学校まで」20.7%と、さまざまな校種に広がっている。

これを集計の方向を逆にして、ある進路を希望する者が、どのような学力の生徒によって構成されているのかをみたのが、図2-2-5である。図2-2-4から予想されたとおり、「大学院まで」「四年制大学まで」の希望者に学力上位層が多く、「短期大学まで」「専門学校・各種学校まで」の希望者に相対

的に低い学力の者が多いという傾向は確認できる。しかし、希望する進路は、学力のみによって決まてはいないことに留意する必要がある。「高校まで」を希望する者のうち、55.0%は「学力下位階層(最下位)」だが、「学力中上位階層」「上位階層」の生徒も、合わせて12.5%いる。「学力下位階層」の生徒の比率がもっとも大きいのは、「高校まで」(55.0%)ではなく、「専門学校・各種学校まで」(59.0%)である。

「大学院まで」と「四年制大学まで」をまとめて、学校ランク・学力階層別に、希望率を示したのが、図2-2-6である。セカンド・ベスト(中上位ランク校)以下の高校では、学力が下がるにつれて、大学院・四年制大学希望率が低下する。たとえば、下位ランク校をみると、「学力上位階層」の大学院・四年制大学希望率100.0%は、学力が下がるにつれて94.7% 82.8% 73.8% 62.0%

(学力下位階層)と低下していく。ところが、上位ランク校では、学力による大学院・四年制大学希望率の差がみられず、「学力下位階層」でも9割以上の生徒が「大学院・四年制大学」を希望している。このことは、中上位ランク以下の高校では、学力が進学アスピレーションの冷却効果を持っているのに対して、上位ランクの高校ではそれが無いことを示し

ている。逆にいえば、上位ランクの高校では、学力いかにかわらず生徒たちを四年制大学への進学へと水路づける、何らかの学校風土(校風)が優勢であることを物語っている。生徒の進学アスピレーションは、個々の生徒が持っている学力だけによって規定されるわけではない。どういう学校に在学しているのかも重要である。

図2-2-4 希望する進学段階(3教科合計の学力階層別)

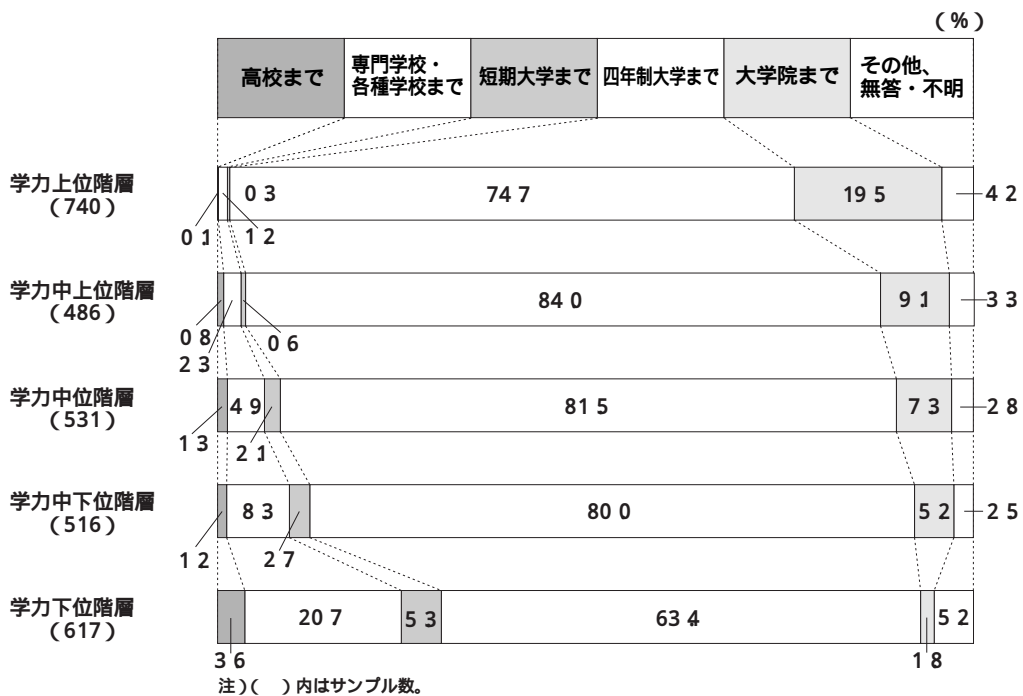


図2 - 2 - 5 3教科合計の学力階層（希望する進学段階別）

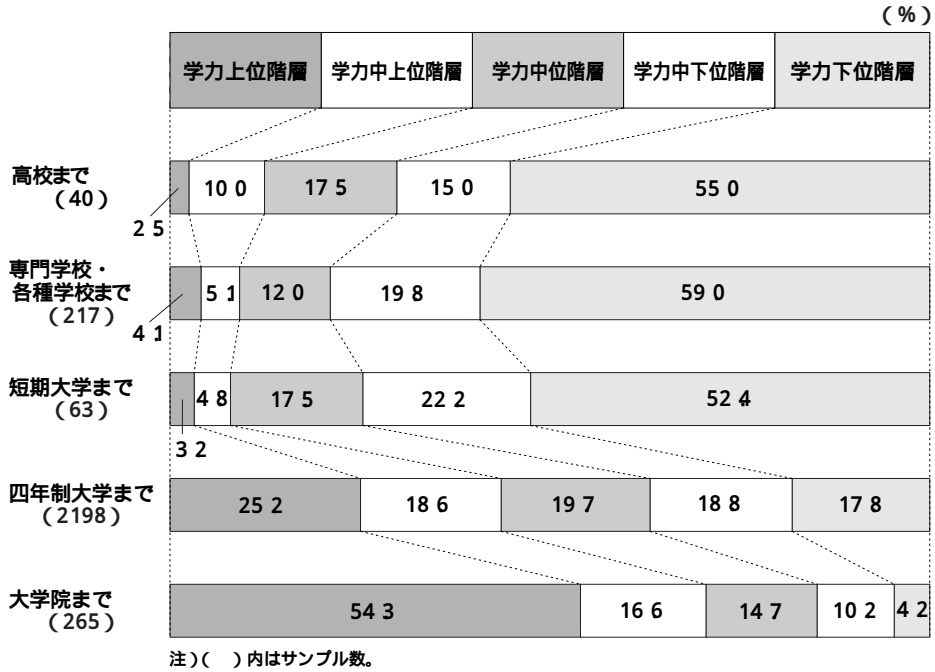
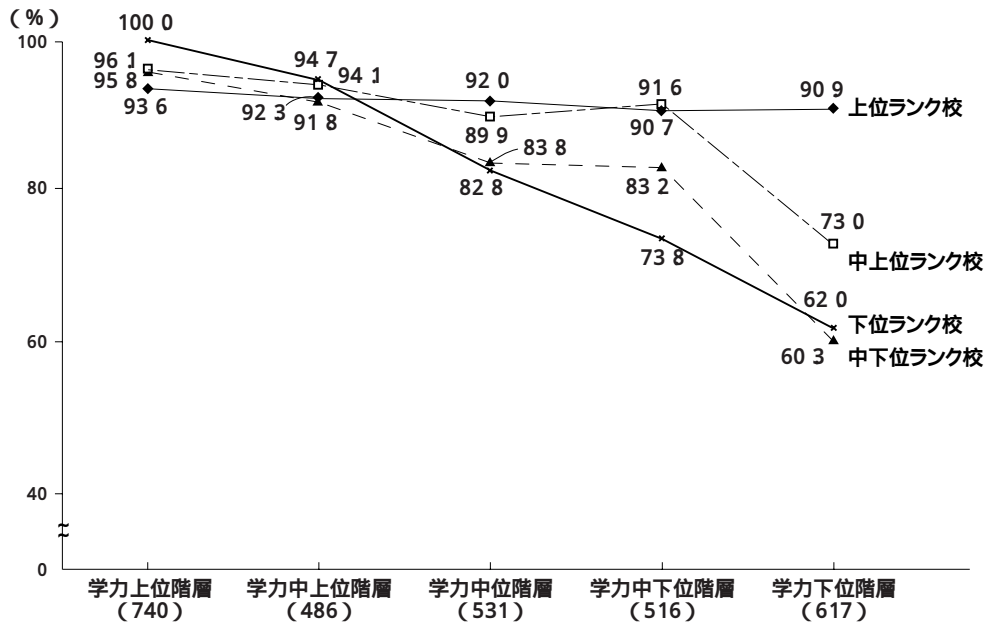


図2 - 2 - 6 四年制大学(大学院含む)進学希望率(学校ランク別×3教科合計の学力階層別)



②希望する大学のタイプ・入試方法と学力

学力が下がるに伴い、「難関ではない大学」と、「私立大学」の希望者が多くなる。入試の方法は、学力上位層ほど「一般入試」を希望する生徒が多く、下位層ほど「推薦入試（AO入試）」が多い。

Q

「四年制大学まで」あるいは「大学院まで」と答えた方にうかがいます。

あなたは、どんな大学へ進みたいと思っていますか。

大学へ進学する方法には、大きく分けて「推薦入試（AO入試）」と「一般入試」の2つの方法があります。あなたは、どちらの方法で進学したいですか。

図2-2-7は、学力階層別に、希望する大学のタイプをみたものである。学力によって希望する大学のタイプは異なっている。「学力上位階層」では、47.1%が「難関の国公立大学」、42.8%が「それ以外の国公立大学」を希望しており、ほぼ9割が国公立大学希望者で占められている。これとは対照的に、「学

力下位階層」では、「難関の国公立大学」は6.5%、「難関の私立大学」は5.7%にすぎず、それ以外の大学を志望する者がマジョリティである。概して、学力階層が下がるに伴い、「難関ではない大学」と、「私立大学」の志望者が多くなる傾向にある。

図2-2-7 希望する大学のタイプ（3教科合計の学力階層別）

	難関の 国公立大学	それ以外の 国公立大学	難関の 私立大学	それ以外の 私立大学	その他、 無答・不明
学力上位階層 (697)	47.1	42.8	2.4	7.2	0.6
学力中上位階層 (452)	29.4	56.6	5.5	4.9	3.5
学力中位階層 (472)	18.9	59.7	6.4	8.3	6.8
学力中下位階層 (440)	15.9	55.0	7.5	14.1	7.5
学力下位階層 (402)	6.5	54.5	5.7	25.6	7.7

注) ()内はサンプル数。

希望する入試の方法も、学力によって対照的である(図2-2-8)。学力上位層ほど「できれば一般入試で」が多く、下位層ほど「できれば推薦入試(AO入試)で」が多く

なる。ただし、「学力上位階層」でも推薦入試を希望する者が4人に1人(25.3%)に及んでいる。

図2-2-8 希望する入試の方法(3教科合計の学力階層別)

